論壇

向上心のある虫
—学者の風貌—

橒野 興夫

はじめに
—洞窟の哲人いでよ！—

日本学術会議の『学術の動向』の『随筆』に昭和56年秋、執筆する機会が与えられた（『哲学哲学への道—時と方法—』2001年1月号）。この度は、論壇への執筆の機会が与えられた。前回の『随筆』がさびしくなる反響（？）があったのだろうか（？）と想像したりもしている。大変光栄なことであるが、今回はむしろ、責任の重さを感じながら『論壇』を書いてみたい。『日本の将来の運命』をかけて「なすべきことをなそう」と『洞窟』から出ていった南原繁（戦後最初の東大総長）の『練られた品性』を静かにして学ぶべき時ではないか。

『総合科学技術会議』VS『日本学術会議』
—格円形の心—で共存

私は最近（6月27日）、内閣府『総合科学技術会議』の議員であり、科学政策について深い見識を有しておられる井村裕夫先生と対談する機会が与えられた（Scientia 8月号）。この対談を通じて、逆に『日本学術会議』の今日の使命とは何かが浮きぼりとなり、その存在意義を深く考えさせられた。

行政機関である『総合科学技術会議』と、かたや総務省の下にあり『真理探求』を天職とするはずの『学者』の集団である『日本学術会議』とで
は、おのずから立場が違う。それぞれの特徴と役割と使命を「静思」する時である。

まさに「真理は円形にあらず、機能形である。
……すなわち、その中心は二個であり、一個にあらず。……万物に二方面があって、一は全く他とその素質を異にする」（内村鑑三）である。

生体には「交通神経」があり、『副交感神経』がある。細胞内には『糖遺伝子』とそれ対極する『糖抑制遺伝子』が存在する。健全な生命システムにとっては「機能形」は必然的なことであろう。

一方、均一な細胞の異常増殖は、癌の特徴であることは周知の如くである。人文社会の同心円は、かたや派閥形成へと導く。

結局、それぞれの置かれた立場を認めながら「機能形の心」で共存していくことが現実的であろう。

『科学する心』とは
—「南原繁」と「矢内原忠雄」に学ぶー

『科学する心』には、「政治にゆがめられた科学する心」と「政治にゆがめられない科学する心」の2種類がある。行政機関である「総合科学技術会議」は立場上当然、前後である。一方、「日本学術会議」は、当然後者であるべきである。もし、後者であることを放棄すれば、『もし塩が塩けをなくしたら……。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです』（マタイ5章13節）の運命である。

『戦争中に文部大臣をされた橋田邦彦という人があります。東大の生理学の教授をされたかたであらためて、その橋田文部大臣が『科学する心』ということを提唱されていて、それが戦争中の教養目標として、新鮮味ある教育方針とされました。
……しかし、橋田文部大臣の方針と政策の中から除外されていたものは、批判的精神ということです。……今日、科学技術教育の振興を技術的にだけとらえまして日本ではこのくらい技術が遅れているということでとらえ、真理探求の精神と社会的批判の精神を、かえてそのためにおおっとしまうことになれば……』（矢内原忠雄、1958年）。

また、矢内原忠雄の前任者であり戦後初の東大総長であった南原繁は「……いまや進歩した文明と大衆社会の時代において、……まず同胞や社会に与える効果について考えやすい。そのために、自ら究めるべきをも究め尽くさないで、人類や大衆、いままだ国家の名において呼びかけるものに、直ちに見りかかる傾向がある。……」（南原繁、1968年）と述べている。

昔（かつて）読んだ2人の文章が妙に現実味を帯びて私に迫ってくる今日この頃である。

『学者の風貌』
—クラーク博士来日125周年—

今年は、北海道大学創立125周年であり、かつ、
有名な「Boys, be ambitious」で知られる「クラーク博士」来日125周年（1876年）である。私が今秋の北大での記念シンポジウムで講演をする機会を与えられたのも不思議な巡り合わせである（「向上心のあるクラブ博士を想起して」10月2日）。

思えば、1876年（明治9年）、6月下旬、マサチューセッツ農科大学学長であったクラーク博士は、横浜に到着し、北海道に向かった。教育方針の違いから北海道開拓使の黒田清隆と船の中で大激論を交わしたが、開校式での彼の演説は学生達を大いに感激させ、学生達の生涯のコペルニクス的な転換点となった。卒業生のその後の明治日本の各界の指導的役割を見れば明らかである。

そして、わずか、8ヵ月後の翌年4月、名言、「少年よ大志を懐け」（Boys, be ambitious）を残して去っていったのである。克拉ーク博士は1826年生まれであるので50歳ということになる。現代の50歳のリーダー（教授を含め）は学生に「大志を懐かせる」風貌があるだろうか？むしろ「Boys, be ambitious」という言葉は、教育の現場からは久しぶり消滅しているのではなかろうか？

最近、大学入試や会社の社試験の面接では驚いたことに尊敬する人物を問うては、ならないと言う。何故なら差別（？）に繋がるからであるとのこと。自分の人生の「恩師」を語ることはばかれる時代的様相である。不思議な時代である。現代は、模範（モデル）を見失っている時代と言われている。むしろ、「大人よ、大志を懐け」と言うべきでこれこそ、温故新創である。

競争的環境の中で個性に輝くことは「なくてもいいものに縛られるな！」—

「競争的環境の中で個性に輝く」ための5カ条を提唱したい。

①複雑な問題を焦点を絞り、単純化する！（複雑の中に原則〈principle〉を求める）
②自らの強みを基盤とする！（尺取虫運動〈自分のoriginal pointを固めてから後ろの吸盤を前に動かし、そこで固定して前部の足を前に進める。かくていつも自分のoriginalityを失わないですむ〉に学ぶ）
③なくてはならないものは多くない！（癌化の起始遺伝子に学ぶ）
④なくてもいいものに縛られるな！
⑤「Red herring」に気をつけよ！

である。

「Red herring（相手にその気にさせて間違った方向に行かせる）に気をつけよ」とはまさに科学的精神性、真理探求の精神、批判的神、すなわち「科学する心」の基本である。この時代に必要なのは「なくてもいいものに縛られず「勇ましい高尚な生涯を送る」学者ではなかろうか？『紳士たる余裕』（勝海舟）を持った学者でよい！
『50年間に30人のノーベル賞受賞』を唱えるなら…
—若き日に人格的出会いを!!—

経済財政諮問会議の国立大学独立行政法人化、民営化、また総合科学技術会議の科学政策の話題が毎日に報じられている。まさに『科学をもって産業を興す』ことは国家的要請である。Translational Researchの奨励、そして国立大学教授が大学の研究成果や、技術を企業に橋渡しする技術移転機関（ベンチャー企業）の取締役会就任することが々々と新聞記事になる世相である。世の中は『改革』、『情報』なる言葉に満ちている。まさに『マス・メディアが伝えると言葉が増殖する』とはよく言ったものである。情報に振り回されず『峻烈なる観察力』（正宗白鳥）を養い『彼は見えて過ぎよう』（ダンテ）と勇気を持って言える胆力のある人間になりたいものである。

昔（かつて）読んだノーベル賞学者湯川秀樹の『貧乏が学者を作る』という言葉が妙に思い出される。『50年間に30人のノーベル賞を』唱えるなら、最も効果的な方法の1つは、ノーベル賞級人物との若き日の人格的出会いによるimprinting（刷り込み）のように思えてならない。若き日に『目標とする学者の風貌』を覚えよ!!

おわりに
—向上心のある虫—

1860年、遺米使節団の中に『3人（小栗忠順、藤海舟、福沢諭吉）の明治国家の父たち』（司馬遼太郎）がいた。ニューヨーク市のブロードウェイでの彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは『考えるかげら黙想と真摯な魂と輝く目』と表現している。まさに現代に求められる『学者の風貌』ではないか！『虫が虫の生態観象を、その住家である泥の立場からだけ論じる場合それが学問的と呼ばれます。しかし、向上心のある虫が空に浮かぶ雲の立場から虫の生態を考察するとたんに、学問的という形容詞は付かないのです』（新渡戸稲造、1888年）。今も昔も勇気のある『向上心のある虫』は少ないようである。まさに100年先を見透す、洞察である。所詮大騒ぎしても『晩一枚ほどの墓場』しか残らない我々は静かに先達に学ぶ時である。

精心 興夫（ひの おきお 1954年生）
日本学術会議実験動物研究連絡委員会委員、（財）癌研究会癌研究所実験病理部部長、信州大学客員教授、日本大学医学部客員教授、明治薬科大学客員教授、医学博士
専門：人体腫瘍病理学、実験病理学（肝発癌と腎発癌）、癌の遺伝学、ヒト結節性硬化症